

サン＝ランベール「ズィメオ」における人食い

田 戸 カンナ

サン＝ランベールの生涯と「ズィメオ」

今日、ドゥドト夫人をめぐるルソーのライバルとして知られるサン＝ランベール侯爵ことジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールは1716年12月26日にロレーヌ地方のナンシーで貧しい貴族の家に生まれた。ポン＝タ＝ムソンのイエズス会の学校で教育を受けたあと、当時ロレーヌ地方を支配しリュネヴィルの宮廷に暮らしていたポーランド王スタニスワフに仕えた。1735年にはヴォルテールと知り合ったが、これはリュネヴィルの宮廷に出入りしていた、サン＝ランベールと同じくロレーヌ人であるグラフィニー夫人を介してのことだった。その後ヴォルテールとは、ニュートンの『プリンキピア』のフランス語訳者として知られるデュ・シャトレ侯爵夫人をめぐる、ライバル関係になった。サン＝ランベールはヴォルテールからデュ・シャトレ夫人を奪うが、彼女はサン＝ランベールとの間に産んだあと間もなく1749年9月10日にこの世を去った。そのためサン＝ランベールとヴォルテールの仲は険悪になったが、二人の仲は数年後に元に戻った。デュ・シャトレ夫人との関係が原因でパリに移り住んだサン＝ランベールは、グラフィニー夫人とヴォルテールの後ろ盾でパリのサロンに出入りするようになった。マルモンテル、エルヴェシウス、ダランベール、ディドロ、アベ・レーナル、ルソーと知り合い、1751年にはドゥドト夫人との関係がはじまった。サン＝ランベールは1756年と1757年にドイツで軍務についたが、健康上の理由で軍隊を離れ、それから文筆に打ち込んだ。そしてデピネー夫人、レスピナス嬢、ジョフラン夫人、デファン夫人のサロンに出入りした。その後はパリ近隣のオボンヌの、ドゥドト夫人の館のそばに引きこもり、大革命期には王制と貴族が失墜するのを悲しく見守り、友人たちが犠牲になるのを見て苦しんだ。彼は1803年2月9日に86歳でパリで亡くなった。

このような生涯を送ったサン＝ランベールは数々の書き物を残した。そのなかには『あらゆる国民の習俗の諸原理、または普遍的カテキズム』（1798年刊）、『二人の友、イロクォイ人の話』（1770年刊）、『偶詠集』といった作品や、エルヴェシウスの詩作『幸福』に対する序文などがある。また、サン＝ランベールがディドロ＝ダランベール編による『百科全書』の執筆に協力したことは忘れてはならないだろう。彼は『百科全書』のなかの「Fantaisie」（気まぐれ）、「Familiarité」（親密さ）、「Fragilité」（弱さ）、「Frivolité」（軽薄さ）、「Génie」（天才）、「Honnête」（誠実）、「Honneur」（名誉）、「Intérêt」（利害）、「Législateur」（立法者）、「Louange」（称賛）、「Luxe」（奢侈）などの項目を執筆している。

だが、サン＝ランベールの名を最も知らしめる著作、それは何と言っても『四季』である。『四季』は詩作「四季」の他に「アブナキ人」、「Th...サラ」、「ズィメオ」、「偶詠」、「東方寓話」を収録しており、1769年に八つ折り判と十二折り判の二版が刊行された。収録作品のうち「アブナキ人」、「Th...サラ」は既に1765年に『ヨーロッパ文学新聞』に掲載されていたが、「ズィメオ」は『四

季』に収められて初めて世に出た。

『四季』に収録された複数の作品のうち当時最も注目されたのは詩作「四季」であった。今日ドット夫人をめぐるルソーのライバルとして知られるサン＝ランベールも18世紀には「四季」を著した詩人として知られていたのである。ディドロやデファン夫人、グリムは「四季」を高く評価しなかった。しかし、ヴォルテールは「四季」を称賛した。このように「四季」に対する評価は大きく分かれたが、18世紀に『四季』が成功したことは否定できない。というのも、サン＝ランベールは『四季』を出版した年の翌年にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれ、アカデミー・フランセーズが1793年に解散したあと1803年に再結成されると再び会員に選ばれたからである。また、ロジャー・リトルの研究によれば、『四季』は18世紀におよそ十回も再版されたからである¹。

だが、1997年にロジャー・リトルの校訂によって『アメリカ短編小説:「アブナキ人」,「ズィメオ」,「二人の友」』がエクセター大学出版局から出版されたことが如実に示すように、20世紀末から21世紀の今日に至るまで、詩人よりはむしろ短編小説家としてのサン＝ランベールが注目されている。サン＝ランベールが残した四つの短編小説、すなわち「アブナキ人」,「ズィメオ」,「二人の友」,「イロクォイ人の話」,「Th...・サラ」のなかでも特に注目されているのが「ズィメオ」である。「ズィメオ」は『アメリカ短編小説』に収録されて世に出たあとも、ユームナ・シャララ編集『18世紀の植民地小説』(2005年,ラルマッタン社刊),ドミニック・ラニー編集『三哲学コント』(2007年,フラマリオン社刊),ロジャー・リトル編集『黒人主人公中編小説選集1769年から1847年』(2009年,ラルマッタン社刊)というように、21世紀に入ってわずか十年の間にたて続けに選集に収められて出版されている。

本稿では20世紀末から21世紀の今注目を浴びている、短編小説家としてのサン＝ランベールが残した「ズィメオ」に焦点を当てる。「ズィメオ」はジャマイカに住む黒人逃亡奴隷を主人公とする短編小説である。イギリスの女流作家アフラ・ベインは1688年に黒人を主人公とする小説『オルノーコ』を出版した。この出版からおおよそ半世紀を経た1745年に『オルノーコ』はピエール＝アントワーヌ・ド・ラ・プラスによってフランス語に翻訳され、フランスで成功を収めていた。この仏訳『オルノーコ』の成功をきっかけにサン＝ランベールは「ズィメオ」を執筆したらしいと考えられている²。

先に「四季」が18世紀に注目されたと述べたが、「ズィメオ」もまた出版当時大いに称賛され、18世紀終わりから19世紀はじめに成功を収めた作品である。経済学者でもあったアベ・ニコラ・ボードー(1730～1792?)によって『市民日誌』という定期刊行物が1765年に創刊され、1772年に廃刊となるまでミラボー侯爵(1715～1789),フランソワ・ケネー(1694～1774),デュボン・ド・ヌムール(1739～1817)らがこの雑誌に定期的に記事を寄稿していた。この雑誌は1767年には重農主義者たちの公的機関誌となり、1768年5月からは実質的に、1769年1月からは正式にデュボン・ド・ヌムールが主幹となっていた。デュボン・ド・ヌムールは重農主義経済学者、ジャーナリスト、出版者であると同時に政治家でもあった人物である。『市民日誌』が文学作品の書評を掲載することはめったになかったのだが、「ズィメオ」は1771年の『市民日誌』(第6巻第2部)で正面から取り上げられた。書評の執筆者デュボン・ド・ヌムールは「ズィメオ」に関する記述を「三番目の短編小説は最も興味深いものである。それは感動的で熱っぽい詩のような作品『ズィメオ』である。その内容は歴史に基づく。『ズィメオ』のおかげで、我々が卑劣で残酷な鎖を使って貶めている、あの黒人たちについて

正しい考えをもつことが可能となる³』という具合にはじめ、部分的に要約しながらも、「ズィメオ」のテキストの大半をこの雑誌に掲載した。「ズィメオ」は当時の雑誌に大々的に掲載されるという栄に浴したのである。また、シャララの研究によれば、1769年から1797年の間に「ズィメオ」は17版出版されたという⁴。さらに、18世紀終わりから19世紀はじめには、ファヴィエールとグレットリの戯曲『エリスカ』（1799年1月1日初演、1812年再演）、ルルデ・ド・サンテールとマルティニーのオペラ『ズィメオ』（9年葡萄月24日初演）など、「ズィメオ」の影響の下に文学作品が作られ発表されている。『エリスカ』ではエリスカの夫はズィメオという名前であり、オペラ『ズィメオ』の舞台はサン＝ランベール作「ズィメオ」と同じくジャマイカである。当時「ズィメオ」の影響は国境を越え、ドイツとイギリスに及んだことも確認されている⁵。

「ズィメオ」が『四季』に収められて初めて世に出た1769年はフランスでは黒人奴隷貿易が行われ黒人奴隷制が維持される一方、黒人貿易や黒人奴隷制を批判する声が叫ばれるようになりはじめた頃にあたる。1772年にはディドロが執筆に協力した、アベ・レーナルによる黒人奴隷制批判を含む書『両インドにおけるヨーロッパ人の植民と貿易の哲学的・政治的歴史』の初版が配給されるし、これ以降18世紀の終わりまで奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する声は強まっていく。1788年にはブリソ・ド・ヴァルヴィルが中心となって黒人奴隷貿易の廃止を目指す「黒人の友協会」が設立され、活動を展開する。サン＝ランベールもこの協会の会員名簿に名を連ねるが、『四季』が刊行された1769年は「黒人の友協会」が設立されるおよそ二十年も前である。サン＝ランベールは反黒人貿易や反黒人奴隷制の主張が声高に叫ばれはじめたばかりの時期にあたる1769年において「ズィメオ」でどのような世界を構築したのだろうか。

「ズィメオ」ではまず物語が語られ、そのあとに黒人に関する、「私」ことジョージ・フィルマーの考察が述べられている。本稿で参照する『18世紀の植民地小説』では物語に約十二ページ、考察に約三ページが割かれている。「ズィメオ」はいわば二部構成になっているわけであるが、はじめの物語の部分で語られる内容と終わりの考察部分で語られる内容には連続性がないことがこれまで指摘されている。『18世紀の植民地小説』に収められた、「ズィメオ」に対する「序」のなかでシャララは次のように断言している。

作り話と「黒人に関する考察」が相互に影響し合っていると思っはならない。独立しうる物語は哲学的教えの事前の具体化とはなっていないだろう。したがって、作品は[・・・]寓話のような均一の教訓的テキストを目指してはいない。作品は物語と哲学的「考察」の間の不連続と同様に、物語内部で多様なイデオロギーの傾向を公然と存在させる⁶。

しかし、シャララが述べるように、「ズィメオ」におけるはじめの物語と終わりの考察は内容的にどこまでも不連続なのだろうか。

黒人奴隷制を正当とする理由

先に述べたように、「ズィメオ」が出版された当時、フランスは大西洋黒人奴隷貿易を行っていた。主人公ズィメオもその妻エラロエも、エラロエの父親マトンバも奴隷船に乗せられてアフリカから植民地に連れて来られた黒人奴隷である。強制的に黒人をアフリカからアメリカやカリブ海の島に連行し、奴隷として酷使することは現代の視点からすれば許されざる行為であるが、当時奴隷貿易や黒人

奴隷制を擁護していた人々は理由を持ち出し、それを正当化していた。その理由とはいかなるものであろうか。一体どのような理由によって黒人貿易と黒人奴隷制は許されたのであろうか。

モンテスキューの『法の精神』（1748年刊）の一節を読むと、当時の人々がどのような理由で黒人奴隷制を正当化しえたのかがみえてくる。『法の精神』第15編第5章「黒人奴隷制について」には以下のように記されている。

Si j'avais à soutenir le droit que nous avons eu de rendre les nègres esclaves, voici ce que je dirais :

[...]

Ceux dont il s'agit sont noirs depuis les pieds jusqu'à la tête ; et ils ont le nez si écrasé, qu'il est presque impossible de les plaindre.

On ne peut se mettre dans l'esprit que Dieu, qui est un être très sage, ait mis une âme, surtout une âme bonne, dans un corps tout noir.

[...]

Une preuve que les nègres n'ont pas le sens commun, c'est qu'ils font plus de cas d'un collier de verre, que de l'or, qui, chez des nations policées, est d'une si grande conséquence.

Il est impossible que nous supposions que ces gens-là soient des hommes ; parce que, si nous les supposons des hommes, on commencerait à croire que nous ne sommes pas nous-mêmes chrétiens⁷.

もし我々が獲得した、黒人を奴隷にする権利を擁護しなければならないとすれば、私は次のように言うだろう。

[...]

やつらは頭のとっぺんから足のつま先まで黒い。やつらは獅子鼻をしているので、やつらを憐れむのはほとんど不可能である。

たいへん賢い存在である神が魂、とりわけ善良な魂を真っ黒な身体に封じ込めたとは思えない。

[...]

黒人には常識がない証拠、それは彼らが文明化した国々で大いに価値のある金^{きん}よりもガラスの首飾りをありがたがることである。

やつらが人間であると思うのは不可能である。なぜならば、もし我々がやつらを人間だと思えば、人は我々自身がキリスト教徒ではないと思いはじめることになるからである。

たしかに、この引用箇所を根拠にしてモンテスキューを奴隷制廃止論者であると主張する研究者もいる。しかし、ことはそれほど単純ではない。なぜならば、モンテスキューは黒人奴隷制廃止論者ではないという、正反対の説を唱える研究者もいるからである。モンテスキュー研究者の間でも、彼が黒人奴隷制を擁護していたのか、あるいは非難していたのかについては今もって見解が分かれている⁸。ただ、上の引用の冒頭の一文は極めて重要である。そこでは従属節の動詞« avoir »が直説法半過去に、主節の動詞« dire »が条件法現在に置かれている。つまり、ここでは非現実な事柄が述べられているわけである。したがって、この文のあとに述べられている内容がそのままモンテスキュー自身の考えそのものであると早急に結論づけることは少なくとも控えなければならないだろう。

本稿ではモンテスキューその人が黒人奴隷制に賛成であったのか、あるいは反対であったのかという問題には立ち入らないが、上に引用した一節を読むと、18世紀半ばの時代において人々が何を根拠に黒人奴隷制を正当化しえたのかが分かる。全身が黒く、獅子鼻の人間は憐れむに値しない、神が

真っ黒な身体に善良な魂を封じ込めるとは考えられない、黒人には常識がない、黒人は人間であるとは思われない。したがって、黒人を奴隷にするのは許される、というわけである。

少々時代が下り、1765年に出版された『百科全書』第11巻の記述は黒人奴隷制を正当とするまた別の理由をはっきりと伝えている。執筆者不明の«NEGRES, (Commerce.)» [黒人 (貿易)] の項目には当時の人々がどのような理由で黒人貿易を支持しようとしていたのかが正面から言及されている。

人々は次のように述べて、この貿易のおぞましい面、自然権に反する面を正当化しようとしている。あれらの奴隷たちは通常、自由を失うことによって魂が救われるのだ。奴隷に授けるキリスト教の教育は砂糖、タバコ、インジゴなどの栽培のために奴隷が是が非でも必要とされていることと結び付いて、貿易の非人間的に見える面を少なくするのだ⁹。

黒人奴隷制を正当とする理由として、モンテスキューの『法の精神』では黒い肌、獅子鼻という黒人の身体的特徴と黒人の常識のなさが問題になっていたが、『百科全書』の「黒人 (貿易)」の項目では取り立ててこのことには言及されていない。しかし、二つのテキストは黒人奴隷制を正当とする理由としてキリスト教を持ち出している点で共通である。『法の精神』では「もし我々がやつらを人間だと思えば、人は我々自身がキリスト教徒ではないと思いはじめることになるからである」とあるのに対して、『百科全書』には「奴隷に授けるキリスト教の教育は砂糖、タバコ、インジゴなどの栽培のために奴隷が是が非でも必要とされていることと結び付いて、貿易の非人間的に見える面を少なくするのだ」と明記されている。一方では自分たちがキリスト教徒であるために、他方では奴隷にキリスト教の教育を授けるために黒人奴隷制は正当化されている。したがって、両方のテキストに「魂」ということばがあらわれるのも納得がいく。『法の精神』には神が真っ黒な身体に善良な魂を入れるとは思われないとあり、『百科全書』には黒人は奴隷になると魂を救済されるとある。両者のテキストでキリスト教そして魂は黒人奴隷制を正当化する要素となっている。

黒人を奴隷にする理由はベルナルダン・ド・サン=ピエールの『フランス島への旅』でも触れられている。1768年に技術大尉の肩書きでフランス島に赴き、そこに二年四箇月ほど滞在して黒人奴隷の生活を目の当たりにした経験をもつベルナルダン・ド・サン=ピエールは帰国後の1773年に『フランス島への旅』を上梓した。この書物の「黒人について」と題された第12の手紙に添えられた「追伸」、「奴隷制に関する考察¹⁰」には以下のように記されている。

彼ら [=神学者たち] は奴隷たちは互いに売り合うことによって、天罰に値したのだと付け加えている¹¹。

ここでは『法の精神』にみられた黒人の身体への言及はなく、もっぱら黒人の悪行が問題となっている。仲間を売り飛ばすというひどいことをする黒人は奴隷にされて当然というわけである。そして、そのように主張するのは神学者たちである。このようにみえると、『法の精神』、「黒人 (貿易)」、『フランス島への旅』に共通して、キリスト教が黒人奴隷制を正当化するポイントとなっていることが分かる。

さらに時代は下り、コンドルセの『黒人奴隷制に関する考察』においても黒人奴隷制を正当とする理由が取り上げられている。1788年に刊行された『黒人奴隷制に関する考察』第二版の第2章は「黒人奴隷制を弁護する理由」と題されており、次のような文章からはじまっている。

人々はアフリカで購入した黒人を奴隷にすることを弁護するために次のように言っている。つまり、これらの不幸な者たちは死刑を宣告された罪人であるか、あるいはヨーロッパ人に買われなければ殺される捕虜である。

何人かの作家はこの考え方に基づいて、黒人貿易をほとんど人間味ある行為として示している¹²。

もちろんコンドルセはこの直後からこうした理由づけに反駁するのであるが、この引用では殺される運命にある罪人や捕虜という身分が明示されている。そして「何人かの作家」にみられるのは、ヨーロッパ人たちが黒人を奴隷にするのはよい行いだという考え方である。ここでは『百科全書』の「黒人（貿易）」の項目で紹介されていた考え方が逆転している。「黒人（貿易）」の項目では「貿易の非人間的に見える面」(ce qui paroît d'inhumain dans un commerce) という表現が使われており、黒人貿易が「非人間的」(inhumain) である点が押し出されていた。しかるに、コンドルセが紹介する作家たちの考えでは黒人貿易は「ほとんど人間味ある行為」(presque un acte d'humanité) とされている。『百科全書』の「黒人（貿易）」の項目と『黒人奴隷制に関する考察』の間で「非人間的」行為から「ほとんど人間味ある行為」への転換が起きているわけである。黒人貿易を善行とみなすならば、黒人貿易に拍車がかかっても何ら不思議ではない。

コンドルセの『黒人奴隷制に関する考察』第二版の出版からおおよそ二年後の1790年2月5日には、「黒人の友協会」によって「黒人貿易廃止のための、国民議会への請願」が公にされた。この請願の最後には会長ブリソ・ド・ヴァルヴィル、書記ル・パージュの名前が刻まれている。この請願にも、当時の人々が持ち出す黒人奴隷制を正当とする理由が引き合いに出されている。

黒人が住む国は不快な不毛の地であり、その人間は人食いであって、常に戦争をしていると人はあなた方に言うだろう。これは海運業者さえ認める嘘である。というのも、海運業者は他方で、その国は人口が多く、人口はすぐに入れ代わると言っているからである。ところで、この人口と不毛及び食人をどうやって両立させることができようか。それに、国が不毛であることは奴隷制を許す理由となるだろうか¹³。

「黒人貿易廃止のための、国民議会への請願」のなかではこのあと奴隷貿易がフランスにとって有利でないこと、奴隷貿易を廃止すべきであることが論証されていくのであるが、この文書においては黒人貿易を正当とする理由として不毛な土地と、黒人が戦争ばかりしている人食いであることが挙げられている。これは先に考察した『法の精神』でも、『百科全書』の「黒人（貿易）」の項目でも、『フランス島への旅』でも、『黒人奴隷制に関する考察』でも触れられていなかった点である。まとめると、身体的特徴、魂が善良ではないこと、常識の欠如、人間とは思えないこと、魂の救い、キリスト教教育、仲間を売ること、罪人、殺される捕虜、不毛な土地、食人というように、黒人奴隷制を正当とする理由は実に多岐にわたっていることが分かる。以上を踏まえた上で次に、このなかでも「ズィメオ」にあらわれる要素である食人に焦点を絞って考察を進める。

食 人

今日では食人は緊急時に生き残るための偶発的食人や、慣習・風習として社会に根付いている食人、あるいは仲間を食べる族内食人や、敵を食べる族外食人や、自らの身体の一部を食べる自食人など、特徴によって区別して研究されているが、本稿では敢てこのような区別をせずに、人肉を食べる行為

全てを食人とみなし考察することにする。というのも、「ズィメオ」を読み進める一般の読者が食人の箇所に差し掛かった時に食人を様々な下位区分に厳密に分類してとらえるとは考えにくいからである。

マルタン・モネステイエはその著書『食人種』のなかで、「17世紀の終わり以来、国王軍と入植地はイギリスと手を結んだ恐るべきカナダの人食い部族と公然と戦争しているだけにいっそう、18世紀フランスの大衆は食人に敏感である¹⁴」と端的に述べているが、18世紀に作られた作品を概観してみると、たしかに食人を扱ったものが数多くあることが分かる。ヴォルテールの哲学コント『カンディード』(1759年刊)第16章では、カンディードとカカンボは大耳族に捕らえられ危うく食べられそうになっている。大耳族はカンディードとカカンボを食べるために大きな釜で湯を沸かし、焼き串を用意していた。ヴォルテールはさらに『哲学辞典』のなかに«Anthropophage»(食人種)という見出しを設けている。『哲学辞典』の項目数は1764年の初版で73、諸版を合わせた最大項目数は118であり、それほど多くはないにもかかわらず、そのなかに「食人種」の項目がわざわざ立てられていることは注目に値する。ここではヴォルテールが1725年にアメリカのミシシッピから来た未開人の女性と話をする機会を得て、その際に彼女に人間を食べたことがあるかどうかを尋ねたことが語られている。その女性は人間を食べたことがあると言い、人肉を食べる理由を述べたのだった。

マルモンテルの小説『インカ帝国の滅亡』(1777年刊)では、アロンソは人食い人種に捕らえられ、危うく食べられそうになる(第20章)、最終章では神父バルベルデは食人種に捕まり、火あぶりにされ、生きたまま肉を引き裂かれ食べられ死ぬ。サドの作品『アリーヌとヴァルクールあるいは哲学小説』(1795年刊)においては、サンヴィルが訪れたアフリカのビュテュアは食人の習慣がある国である。この国に長らく住むポルトガル人サルミエントはサンヴィルの目の前でジャガ人の肉を食らう。1792年に発表された、イギリス人ジェイムズ・ギルレイの有名な風刺画『パリの晩餐』は文字どおりズボンをはいていないある家族が貴族を貪り食っている場面を描いたものである(図1参照)。この風刺画が端的に示しているように、大革命には人食いのイメージが付きまとっていた。

フランス史のなかで実際に行われた有名な食人といえば、テオドール・ジェリコーが描いたメデューズ号の筏での出来事が挙げられよう。イギリスからセネガルを返還されたフランスはこの返還を確認するために1816年にセネガルに艦隊を派遣した。艦隊はメデューズ号、ロワール号、アルギュス号、エコー号の四隻から構成されていた。1816年7月2日、セネガル総督ジュリアン・シュマルツや科学者、兵士ら四百名近くを乗せたメデューズ号は操縦ミスによりセネガル沖で難破した。船長は亡命先から帰ってきた王党派のデュロワ・ド・ショマレだった。ボートの数が少なかったため、巨大な筏がつくられ、ボートと筏は7月5日に航行しはじめた。ところが、ボートは筏を曳航するはずだったにもかかわらず、ボートに乗った船長はロープを切るように命じ、およそ百五十名を乗せた筏はボートから切り離された。筏は7月6日から同月17日まで漂流し、アルギュス号によって発見された時には筏の上にはわずか十五人しか生き残っていなかった。そのうちの五人も間もなく亡くなった。

この時の生存者である測量技師アレクサンドル・コレアールと外科医アンリ・サヴィニーは難破の体験を執筆して『1816年にセネガル遠征に加わったフリゲート艦メデューズ号の難破』の題のもと1817年11月に出版したところ、この書は反響を呼び再版を重ね、船長の無能さと裏切り、筏に乗った人々が繰り広げた生き残るための闘いの様子が広く知られるようになった。筏に乗った人々は7月13日には病人と負傷者を海に投げ捨てたのだが、その前の7日からは争いで殺された者たちの肉が食べられていた。『19世紀ラールス大百科辞典』はメデューズ号の筏で行われた食人について言及し



図1 ジェイムズ・ギルレイ『パリの晚餐』
<http://drawpaintprint.tumblr.com/search/James+Gillray>



図2 ジェリコー『メデューズ号の筏』
 の素描（部分）
<http://www.wikiart.org/en/theodore-gericault/scene-of-cannibalism-for-the-raft-of-the-medusa>

たあと、「似たような出来事は恐怖と同じくらい憐れみをかき立てるにちがいない¹⁵」と述べている。ジェリコーが『メデューズ号の筏』(1819年サロンに出展)で描いたのは筏の上の生存者たちが彼方に船を認めた瞬間であり、食人が行われているまさにその瞬間ではない。食人のシーンを描いていたならば、品位を下げますという理由で『メデューズ号の筏』はサロンに展示されなかったであろう。だが、ジェリコーが『メデューズ号の筏』のために制作した多くの素描のうち一枚(図2参照)は筏の上で食人が行われたことを生々しく伝えている。この素描では遭難者の一人が、おそらく既に死んだと思われる仲間の腕にかぶり付いている。

18世紀のフランスにおいても人食いが一度も行われていなかったとは断言できない。虚偽だと主張する者もいるが、ソンプルイユ嬢(1774~1823)の伝説が今日までも残っていることは軽視できない。伝説によれば、父親に献身的に尽くしたことで知られるソンプルイユ嬢は大革命期に父親の命を救うためにコップ一杯の人間の血を飲まされたという。厳密に言えば、人間の血液を飲むことと人肉食を食することは同じではないが、人間の血を飲むことは人肉食に近い行為である。

では、18世紀フランスにおいて食人は一般にどのようなものとしてとらえられていたのだろうか。人々は食人についてどのようなイメージを抱いていたのだろうか。

ディドロは『百科全書』の項目«CARAIBES, ou CANNIBALES»(カリブ族あるいは人食い人種)のなかで「カリブ族あるいは人食い人種」を「アメリカの島に住む未開人¹⁶」と定義し、彼らの気質や習慣を紹介するなかで、「彼らは捕虜を焼いて食する。捕虜の肉の一部を友人に送る」と明記している。また、神学者マレ(1713~1755)は『百科全書』の項目«ANTHROPOPHAGIE»(食人)のなかで「食人」を「人肉食を食する行為あるいは習慣¹⁷」と定義し、「人肉食を食べて生きる慣習はアフリカ南部のいくつかの地域とアメリカのいくつかの未開地域でまだ残っているらしい」と述べている。さらにヴォルテールは『哲学辞典』の「食人種」の項目のなかで「食人種がいたのは本当である。我々

は食人種をアメリカで発見した。食人種はおそらくまだいるだろう¹⁸」と記している。ディドロ、マレ並びにヴォルテールの記述を総合すると、18世紀のフランスではアメリカやアフリカには当時食人種がいると信じられていたことが分かる。

ところで、モンテーニュは『エッセー』第1巻第30章「人食い人種について」(Des Cannibales)のなかでダイレクトに食人に触れている。モンテーニュが聞いたところによれば、新世界に住む食人種たちは戦をし、捕虜を捕まえると、その捕虜を人々の前で剣で殴り殺し、その肉を焼いて皆で食べるという。そしてその場にいなかった友人たちにはその肉の切れ端を送るといふ。それは栄養を取るためではなく、ただ捕虜に対する復讐を果たすためである。しかし、モンテーニュはこのような習俗をもつ食人種を非難しているのではない。モンテーニュはこのあとに以下のように付言するのを忘れない。「わたしからすれば、死んだ人間を食べることよりも、生きた人間を食べるほうが、もっと野蛮なことだと思う。死んでから、それを焼いて食べるよりも、まだ感覚が十分に残っている肉体に、拷問や責め苦を加えて、引きちぎってばらばらにしたり、じっくりと火にあぶったり、犬や豚に噛みつかせて、なぶり殺しにしたりするほうが、よほど野蛮なことではないか¹⁹。」この思想家は文明に染まったヨーロッパ人に批判の眼差しを向けると同時に、食人種たちを容認している。

たしかに、モンテーニュが述べる、捕虜の肉を焼いて食べ、肉の切れ端を友人に送るといふ習慣はディドロが『百科全書』の「カリブ族あるいは人食い人種」の項目で展開している記述とぴったり重なる。しかしながら、モンテーニュにみられる食人種の容認は18世紀フランスの人々に受け継がれてはいない。18世紀フランスにおいては、食人は野蛮で反文明的で危険な行為とみなされていた。それはマレが先の『百科全書』の項目内で食人を「野蛮な習慣」(coûtume barbare)、人肉を「おぞましい料理」(horrible mets)と表現していることから明らかである。ヴォルテールは『哲学辞典』の「食人種」の項目で「文明化したと言われる国々が負けた敵を串刺しにしないのは正しかった。というのも、隣人を食べることが許されれば、我々は間もなく同国人を食べることになるからである。これは社会の美德にとって大きな不都合となるだろう」と述べている。ヴォルテールは食人を反文明的であり、社会道徳上危険なものとみなしている。サドの『アリーヌとヴァルクール』においてもサルミエントがサンヴィルに人肉を差し出すと、サンヴィルは「あなたのご馳走にはぞっとする・・・それに触れるよりは死んだほうがいい・・・²⁰」と言い、人肉を「身の毛がよだつ料理」(plat effroyable)と呼び、人肉食の習慣を「品行の墮落」であるとしている。

食人を否定的にみる態度はキリスト教とも関わっている。たしかにマルタン・モネステイエが述べるように、キリスト教には食人の側面がある。神は自らの血と肉をキリスト教徒に与え、キリスト教徒はキリストの体であるパンを食べ、キリストの血である葡萄酒を飲む²¹。聖体拝領である。ヨハネによる福音書6には次のようにある。「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる²²」(53-54節)。しかしながら、キリスト教は原則的に食人を認めないのではなかったか。『旧約聖書』ではレビ記26章、申命記28章、列王記下6章、哀歌2第二の歌、哀歌4第四の歌などで食人に触れられている。このうち列王記下6章、哀歌2第二の歌、哀歌4第四の歌においてはそれぞれ、「わたしたちはわたしの子供を煮て食べました²³」(29節)、「女がその胎の実を／育てた子を食い物にしているのです²⁴」(20節)、「憐れみ深い女の手が自分の子供を煮炊きした。[・・・]それを自分の食糧としたのだ²⁵」(10節)というように、既に行われた、あるいは今行われている食

人が問題となっている。これに対してレビ記 26 章、申命記 28 章においては食人が未来における罰として預言されている。

それでも、まだわたしの言葉を聞かず、反抗するならば、わたしは激しい怒りをもって立ち向かい、あなたたちの罪に七倍の懲らしめを加える。あなたたちは自分の息子や娘の肉を食べるようになる²⁶。(レビ記 26 章 27-29 節)

あなたは敵に包囲され、追いつめられた困窮のゆえに、あなたの神、主が与えられた、あなたの身から生まれた子、息子、娘らの肉さえ食べるようになる²⁷。(申命記 28 章 53 節)

食人が野蛮で反文明的でおぞましく、社会的に危険であるならば、また『聖書』の教えに原則的に反するならば、黒人は食人種であるらしいという推測は黒人を奴隷にする理由となりうる。

「ズィメオ」における食人

「ズィメオ」では作中人物によって食人が行われる。ズィメオ、エラロエらはポルトガル人にだまされて奴隷船に乗せられアフリカを離れた。ところが、一箇月以上経った頃、風が弱まり、航行速度が落ちた。ついに風がぼったりなくなった。すると、白人たちは残りわずかな食べ物を自分たちのために取っておき、黒人が黒人を食べるように命ずる。ズィメオはジョージ・フィルマーに以下のように語っている。

どの顔にも食い意地からくる喜び、不吉な恐怖、野蛮人の期待が見えました。同じ奴隷制のこの不幸な仲間たちがものすごく注意して虎の目をして互いに観察し合っているのが分かりました。

最初の犠牲者は最も空腹な者たちのなかから選ばれました。それはオネボ村の二人の娘でした。私にはその不幸な者たちの叫びがまだ聞こえます。二人をむさぼる飢えた仲間の顔に涙が流れるのが今も見えます²⁸。

しかし、ここで注意したいのは主人公たち、すなわちズィメオとエラロエは人肉を食べるのを拒否したことである。

私たち [=ズィメオとエラロエ] は誰にも気付かれずに、差し出された恐ろしい二人分の肉を海に投げ捨てました。

ズィメオにはまだ食べ物があった。なぜならば、ズィメオは食事を拒否していた二人の黒人からもらったナツメヤシの実を隠し持っていたからである。ここで描かれているのは、白人に命令されるがままに仲間の肉を食べる黒人と、人肉を「恐ろしい」として食するのを敢て拒否する黒人という二通りの黒人の姿である。サン＝ランベールは全ての黒人が食人者ではないことを描いてみせている。「ズィメオ」では黒人は全て食人者であると一般化することはできない仕組みになっている。

ところで、現実の黒人奴隷制下においては黒人は奴隷主に残酷に非人間的に扱われるのが当然のこととしてまかり通っていた。鞭打ち、手足の切断などはめずらしくなかった。「ズィメオ」においても黒人を酷使し痛めつけ、非人間的に扱う白人たちが描かれている。ジョージ・フィルマーが訪れたジャマイカのプランテーションはそのようなものだった。「主人たちは奴隷を残酷に扱っていた。私はこれらの奴隷たちの食べ物、仕事を知り、[・・・]あまりの残酷さに震えた²⁹。」この他にはズィメオらをだまして奴隷として船に乗せたポルトガル人、ポルト・ベローに着いて、愛し合うズィメオ

とエラロエを無理やり力づくで引き離した白人たち、エラロエに言い寄り拒否されるとマトンバの足を切断させたスペイン人奴隷主といったように、黒人を非人間的に扱う白人がいる。

しかし、「ズィメオ」にあらわれる白人はそのように黒人を非人間的に扱う者ばかりではない。誰よりも「ズィメオ」の主人公の一人であり、「ズィメオ」全体の語り手であるジョージ・フィルマーは黒人に味方する白人である。それは「ズィメオ」の終わりで彼の反黒人奴隷制の意見が展開されていることから明らかである。だが、彼が黒人の味方であることは早くも「ズィメオ」の冒頭で暗示されている。なぜならば、「ズィメオ」のタイトルの直後、本文の直前には「クエーカー教徒に生まれた、*ジョージ・フィルマー*による」(Par *GEORGE FILMER*, né primitif) と明記されているからである。シャララによれば、「primitif」ということばはここではクエーカー教徒を指し示すという³⁰。クエーカー教徒たちは早くも17世紀終わりにアメリカで黒人奴隷制に反対を唱えていたのであるから、ジョージ・フィルマーが黒人の味方であることは作品のはじめから示唆されているわけである。

ジョージ・フィルマーはさらに、黒人のために具体的に行動する人物である。彼はスペイン領植民地で片足を切断され岸に打ち捨てられていたフランシスク、つまりマトンバを助けて自分の船に乗せる。そればかりかフランシスクと引き離されたくないというマリヤンことエラロエの願いを聞き入れ、両者と、マリヤンの子供を奴隷主から買い取り、友人のポール・ウィルマウスに委ねる。また、ジョージ・フィルマーはズィメオからそれまでの人生の話聞き、ズィメオらと友情で結ばれる。「私たちは黒人逃亡奴隷と我々同国人の間で和平が結ばれたらすぐに彼らに会いに行く」と約束した。私はもう約束を守った。私はズィメオとマトンバとエラロエの勇気と深慮と友情をまた享受しに行こうと思っている³¹。」

「ズィメオ」にあらわれる、黒人に味方する白人はジョージ・フィルマーただ一人ではない。彼の友人ポール・ウィルマウスもまたそのような人物である。そもそもジョージ・フィルマーとポール・ウィルマウスが似ていることは作品の最初のパラグラフで明快に語られている。「彼 [=ポール・ウィルマウス] は私と同じようにクエーカー教徒に生まれた。私たちはほぼ同じ考え方をしていた³²。」そして作品のはじめのほうでウィルマウスが黒人を大切にする奴隷主であることが語られている。

ウィルマウスは自分の奴隷にほどほどの仕事しか要求していなかった。奴隷たちは毎週二日自分たちのために働いていた。奴隷は一人一人土地を譲り受け、それを思うままに耕し、作物を売ることができた。十年間きちんとしていた奴隷は解放される自信があった。

ウィルマウスのプランテーションでは奴隷たちは毎晩歌い、楽器を奏で、踊り、病人も少なく、怠ける者もほとんどおらず、盗みや自殺、陰謀もなかった。ウィルマウスが黒人を大切にするさまはこのあと繰り返し語られ、強調されていく。フランシスクはウィルマウスに言う。「あなたが奴隷にどんな食べ物を与えているのかを戦士たちに言うために彼を遣ってください。私たちに對するあなたの友情、私たちの平和な暮らし、私たちの喜びと楽しみを彼が戦士たちに語るようにしてください³³。」「皆はウィルマウスの親切な行いと自分たちの幸せをズィメオに語った。奴隷たちはズィメオを自分の小屋に連れて行って、どれほど小屋がしっかりとして住みやすいかを見せたがった。奴隷たちは自ら稼いだ金銭をズィメオに見せた³⁴。」

このように「ズィメオ」の世界には黒人奴隷を非人間的に扱う白人と、黒人奴隷に味方する白人の両方がいるわけであるが、ズィメオ個人は両者を明確に区別している。なぜなら、彼はやさしい白人

と残酷な白人に対して明らかに意識的に態度を変えているからである。「ジョン [=ズィメオ] は黒人たちがひどい扱いを受けたプランテーションでは男も女も子供も容赦なく喉をかき切り、それ以外のプランテーションでは奴隷を解放するに止まることを私たちは知った³⁵。」

上述したように、「ズィメオ」の世界には食人を行う黒人と行わない黒人がいるのと同様に、黒人を非人間的に扱う白人と黒人に味方する白人がいる。「ズィメオ」では黒人は誰もが食人者であるとか、あるいは白人は誰もが黒人を残酷に扱うとは言えないようになっている。「ズィメオ」は黒人や白人を一般化することを嫌い、黒人、白人それぞれの相反する姿を描き出すのである。

ところで、白人の特徴及び黒人の特徴をそれぞれ一般化することの拒否、これはまさしく「ズィメオ」の終わりのジョージ・フィルマーによる考察のなかで展開されていることではなかったか。ジョージ・フィルマーは以下のように語っている。

我々の第一の不当な行いはアフリカ人たちに一般的な性格を与えることである。[・・・] 獅子鼻と分厚い唇は白人の特質でも黒人の特質でもない。白人のなかにはラップ人、タタール人、エスキモー、ムガール人、中国人がいて、彼らはこの二つの醜さを持っている。アフリカ人のなかには、全員が体つきと顔がこの上なく整っている民族がいる。黒人は一般的に怠け者で盗人で嘘つきで陰険だというのも本当ではない。これらの性質は奴隷制から来ているのであって、自然の姿ではない³⁶。

既に述べたように、「ズィメオ」の物語の部分とジョージ・フィルマーの考察の部分は「不連続」であることが研究者によって指摘されていた。しかし、上のような視点からすると、「ズィメオ」の物語はジョージ・フィルマーの考察の例証になっていることが分かる。物語部分と考察部分は一見したところみえにくいだが、実は緊密に結び付き、物語と理論が互いに支え合っていると見えよう。

注

- 1 Roger Little, Introduction à *Contes américains : L'Abenaki, Ziméo, Les deux amis*, University of Exeter Press, 1997, p. VIII.
- 2 Youmna Charara, Introduction à *Ziméo, Fictions coloniales du XVIII^e siècle*, L'Harmattan, 2005, p. 34.
- 3 *Éphémérides du citoyen*, t. VI, 1771, p. 178-179.
- 4 Youmna Charara, Introduction à *Ziméo*, p. 29.
- 5 La note de Roger Little, Introduction à *Contes américains*, p. XXII.
- 6 Youmna Charara, Introduction à *Ziméo*, p. 39.
- 7 Montesquieu, *De l'esprit des lois*, GF Flammarion, t. I, 1979, p. 393.
- 8 以下参照。市川慎一「十八世紀前半の奴隷制批判——ジョークールの『百科全書』項目を中心として——」『Études françaises』n° 2, 1995年, 1-18頁。
- 9 *Compact edition, Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, Readex Microprint Corporation, t. II, 1969, p. 1014.
- 10 ルビ点は原文イタリック。以下同様。
- 11 Bernardin de Saint-Pierre, *Voyage à l'île de France*, La Découverte, 1983, p. 122.
- 12 *La Révolution française et l'abolition de l'esclavage*, EDHIS, t. VI, 1968, p. 3.
- 13 *La Révolution française et l'abolition de l'esclavage*, t. VII, p. (7).
- 14 Martin Monestier, *Cannibales : histoire et bizarreries de l'anthropophagie hier et aujourd'hui*, Le Cherche midi, 2009, p. 37.

- 15 Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Administration du Grand dictionnaire universel, t. I, 1866, p. 435.
- 16 *Compact edition, Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. I, p. 426.
- 17 *Ibid.*, p. 149.
- 18 Voltaire, *Dictionnaire philosophique I, Les Œuvres complètes de Voltaire*, Voltaire Foundation, t. XXXV, 1994, p. 344.
- 19 Montaigne, *Les Essais*, Bibliothèque de la Pléiade, 2007, p. 216. 引用は以下の邦訳を使用させていただいた。モンテーニュ『エッセー』2, 宮下志朗訳, 白水社, 2007年, 71頁。
- 20 Sade, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, 1990, p. 561.
- 21 Martin Monestier, *Cannibales, op. cit.*, p. 138-139.
- 22 『聖書 新共同訳』日本聖書協会, 1998年, p. (新) 176.
- 23 同上書, p. (旧) 587.
- 24 同上書, p. (旧) 1288.
- 25 同上書, p. (旧) 1292-(旧) 1293.
- 26 同上書, p. (旧) 206.
- 27 同上書, p. (旧) 326.
- 28 *Fictions coloniales du XVIII^e siècle*, p. 57.
- 29 *Ibid.*, p. 49.
- 30 La note de Youmna Charara, *ibid.*, p. 65.
- 31 *Ibid.*, p. 60.
- 32 *Ibid.*, p. 49.
- 33 *Ibid.*, p. 51.
- 34 *Ibid.*, p. 53.
- 35 *Ibid.*, p. 52.
- 36 *Ibid.*, p. 61.

主要参考文献 (引用文献を除く)

- ATTALI, Jacques.- *L'ordre cannibale : vie et mort de la médecine*.- Paris : Grasset, 1979.- 325 p. (ジャック・アタリ『カニバリズムの秩序 生とは何か／死とは何か』金塚貞文訳, みすず書房, 1994年, VI-391-24頁。)
- MARSHALL, P. J. WILLIAMS, Glyndwr.- *The great map of mankind : British perceptions of the world in the Age of Enlightenment*.- London : Dent, 1982.- 314 p. (P・J・マーシャル, G・ウィリアムズ『野蛮の博物誌 18世紀イギリスがみた世界』大久保桂子訳, 平凡社, 1989年, 502頁。)
- POIRIER, Roger.- *Jean-François de Saint-Lambert (1716-1803) : sa vie, son œuvre*.- Sarreguemines : Pierron, 2001.- 337 p.
- 工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説 植民地・共和国・オリエンタリズム』東京大学出版会, 2003年, XII-426-47頁。
- 坂倉裕治『ルソーの教育思想』風間書房, 1998年, III-IV-344頁。
- 竹田英尚『文明と野蛮のディスコース——異文化支配の思想史 (I)——』ミネルヴァ書房, 2000年, X-310-10頁。
- 中野美代子『カニバリズム論』福武文庫, 1989年, 288頁。
- 弘末雅士『人喰いの社会史 カニバリズムの語りと異文化共存』山川出版社, 2014年, 202-25頁。
- 正木恒夫『植民地幻想 イギリス文学と非ヨーロッパ』みすず書房, 1995年, 256頁。

(たど かなな 総合教育センター)